

## 雜 錄

## ヅェルケムの訃及び其の社會學的研究

銅 直 勇

一九一七年十一月九日、エミール・ヅェルケムが死んだ。曩に其の子息がセルビアに戦死して以來、快々として樂まず、健康も亦勝れなかつたと傳へられたが遂に五十九歳をもつて逝いたのである。

ヅェルケムはタード、ギディングス、ウガート、ジムメル等と共に最近社會學の大家として忘るべからざる人である。私は左に少しく彼の小傳と、其の社會學的研究の一斑を述べて彼の死を記念したいと思ふ。

彼の閨歴の詳細、性格の如何等は、其の死が極

最近の事實であるが爲めこゝにこれを傳ふべき資料は殆んど未だ現れてゐない。只其の門下生ダビの記す所によると彼は一八五八年フランスのエピナールに生れ、長じて其處のコレージュに入つた後更に轉じてルイ二世のリセーに學び一八七九年に高等師範學校に入學した。そして一八八二年に哲學のアグレゼエの試験に通過して諸處の中學校に哲學を教授した。此頃から彼は専ら力を社會學の研究に注いだが更に其研究を一層進める爲めに一年の休職を許されて其半をバりに残りの半を獨逸に送つた。彼が漸く學界に認めらるゝに至つた

のは、彼が獨逸から歸國後、哲學評論、萬國教育評論等に於て發表した獨逸に於ける哲學研究に關する論文によつてであつた。かくて一八八七年ポルドー大學文科大學講師に任ぜられ社會學及び教育學の講義を擔當した。記憶すべきは佛國大學に於て社會學の講義が開設されたのはこれが嚆矢といふことである。次で一八九六年獨立して一講座となるに及んで彼は其の講座擔任の教授に任ぜられてこゝに一九〇二年まで在任した。然るに同年パリのソルボンヌ大學文科大學の教育學教授ピイソンの代理として教育學を講ずることを命ぜられ一九〇六年更に其の講座は教育學及び社會學に變更され爾來彼は引續き其の教授として在任し、一方コレージュ・ド・フランスの故タード教授と相對して佛國社會學界の二分野を劃してゐたのである。

ツェルケムの著書として世に公にされたものは

Quid Secundatus Politicæ scientiæ instrumentæ  
contulerit. 1892.

Du la Division du Travail sociale. 1893.

Les Règles de la methode sociologique. 1895.

Le Suicide, Étude sociologique. 1897.

Les Formes élémentaires de la Vie religieuse.  
1912.

の五書がある。其他幾多の論文目錄は

Gelke: -E. Durkheim's Contribution to Sociolo-

gy. 1915.

の卷末に網羅してある。尙ツェルケムの事業として忘るゝことの出来ないことは其の主裁の下になる十二卷の社會年報叢書の發行である。彼はこれによつて彼及び其の協同者即ち所謂社會學年報派諸學者の新研究を公にすると共に諸般の社會科學の新出論著中社會學研究上特に必要と思はるゝものに就いて批評紹介を企て一八九七年以後一九一三年まで十二卷を續刊したのである。尤も終頃に

於てこの計畫は多少の變更を加へられたが、此の中には宗教社會學、原始宗教の研究に就て特に注意すべき幾多の研究が掲載されてゐる。

ヅェルケムの社會學に對する貢獻は少くともこれを二つに分けることが出来る。即ち彼が社會學的方法論の原理を樹立したこと、更に其等原理を應用して特殊の社會現象に新研究を行ふたことである。後者の研究中特に其の道德的的法律的研究、宗教的社會學の研究、社會學的認識論の研究等は後世倫理學法律學宗教學認識論等社會學以外の研究者に對しても寄與する所が甚だ多いであらう。今第一から少しく述べて見たい。

ヅェルケムの社會學に對する努力は先づ社會學をして如何にして一の獨立なる自律的自然科學たらしめるかに出發する。即ち彼の見る所によると社會的事實は社會的事實そのものによつて説明さ

れねばならぬ。社會的事實は生物現象とも又心理現象とも異つた特別なる現象であるといふことである。

蓋し從來思想家が社會現象に對して執り來つた唯心論的考察を排して一の獨立なる實證的新科學を樹立したのは實にコント、スペンサー等の貢獻であつた。然しながら彼の考ふる所によると、此等の社會學に於て生物學と社會學との親密な關係が高潮された結果、爾來社會學をもつて生物學に屬する一部門であるかの如き傾向を生じ來つた。而して彼の心理學的社會學は正に其の反動として生れたのである。此の點に於けるタードの貢獻は大なるものがある。然しながら彼の考ふる所によると、タードは社會學を生物學より解放したと同時にこれを心理學の一部門若しくは其の延長と見る傾向を發達せしむるに至つた。タードに對する彼のこの見解が正しいか否かは姑く措いて、彼は

かく考へて社會學を生物學より解放すると同時に心理學よりも解放して一の自律的獨立科學を樹立するのが自己の任務であると考へたのである。即ち社會的事實を個人心理の上から説明せんとする輓近社會學界の主潮を排して飽迄も社會的集團的事實によつて之を説明せんとしたのである。即ち社會學が獨立なる科學として存立するには生物學的でもなく心理的でもない或る特別なる事實又は實在をもつて其の對象としなければならぬと考へたのである。

彼はかくの如き見地から社會的事實の概念を以て、個人意識の外に存立して個人意識に自己を推し附ける所の行動と考へ又は感ずる仕方であるとすした。即ち社會的と認めらるべき特徴は要するに個人意識に對して外在的であるといふと、及び個人意識に對して強制作用を及し又は及し得るといふ二點に歸するのである。かやうに社會的事實の

個人心理的説明に反對する彼の見地から見れば則ち彼は個人以外の、而して又何等か非心理的な一定の最も根本的な社會的集團的事實を認め、これを根柢として一切の會社現象が生起發達するものと解釋しなければならぬ。然し彼は社會現象より個人的要素を全然放逐して了はうとする如き説は決してしてゐない。否彼の所謂集團心の説明は事實個人心理現象の比論よりなり、又少くとも其の初期の研究に於ては比較的個人的要素を重要視したのであるが、彼が自然人民の社會現象の研究に没頭するに至つて反個人心理的傾向は愈々強くなつたのである。蓋し彼の社會的事實の概念は彼の社會的分業論以前の數種の論文に於ても見る事が出来るが、それが精練をへて論述されてゐるのは右の分業論で、更に其後の著作社會學的方法論に於て最も明確に組織的に論ぜられて居る。

彼は先づ神經要素間の關係から個人的表象が起

るを見、此の個人の生理的實體と心理的生活とを結合する關係と全く同一の關係が社會的實體と社會的生活とを結合してゐるものと見た。即ち彼は社會的集團的事實を分類して集團的實體と集團的生活とに分ち、後者は前者に依屬すると同時に又之と區別さるゝもので、二者の關係は恰も機能と器官との關係と同様であるといふのである。而

して彼は彼の所謂形態學的事實をもつて集團的實體とし、生理學的事實をもつて集團的生活とした。謂ふ所の形態學的事實とは社會の容量即ち人員の數と社會の密度、即ち人口集中の度合との二者であつて、彼はこれを以つて社會進歩を説明し決定する根本的原因であると説いてゐる。此の點に於て彼の所説はかの社會的變動の根本原因を凡て其時代の經濟的組織の變動に歸せんとするマルクスの唯物史觀と正に其の軌を一にするものといはねばならぬ。次に其の生理的事實とは此の社會的地

盤より生ずる宗教的事實、道德的事實、法律的事實、經濟的事實、言語的事實、藝術的事實等といふのである。彼はかゝる見地から社會的分業論を著し社會の容量及び密度の變動が如何にして分業を發達せしめ、又分業の發達によつて如何にして社會進化及び人格の發達が行はるゝかを説明せんとしたのである。

然しながら社會的事實は甚だ複雑である、それは永き歴史的發展の過程中に漸次に形成されるものである。故に吾人は此の發達の全過程を溯つて如何なる時代、如何なる影響の下に如何に社會的事實の成立要素が變動して來たかを研究しなければ到底社會的事實の真相を理解することは出来ないのである。こゝに於て彼は歴史をもつて社會學的方法の必需なる道具と考へた。然し社會學の研究は歴史の比較的研究とは異り、社會的制度一般の研究である。かく考ふる時社會學者は歴史の比較

的研究法を行はなければならぬと見、彼はこの比較的方法を社會學研究の唯一方法とまで極言してゐる。事實彼の研究は次第に歴史的比較研究となり特に原始民の社會現象の研究に多くの力を注ぐに至つたのである。

蓋し彼の初期の努力は社會的事實の概念の決定闡明にあつた。而してその所謂社會的事實の性質を最もよく現せるものとして近世文明國民間に於ける道徳的、法律的、經濟的諸問題により多くの努力を傾けたのである。然かも彼が歴史的研究に移つて原始民間の社會現象を研究するに當つて宗教が大なる勢力を有してゐるものなること、又宗教現象は社會現象の真相を最もよく發揮したる社會現象であることを覺るに至つた。結果彼が初期に於ける唯物的傾向はこの期に及んで大に減じて精神的觀念的傾向が甚だ強くなつた。即ち彼及び所謂社會學年報派の諸學者の宗教社會學的研究は

かくて幾多の論文となつて年報誌上に發表さるゝに至つたのである。同時に原始人民の知力的機能に對する研究は新に認識の社會學的研究となつて現れ、形而上學的又は論理的認識論以外一の新しき文獻を認識論の學史上に寄與するに至つたのである。(これに就いては既に本誌第九號に於て社會學的認識論なる題目の下に米田先生の詳細なる説明がある。)

彼の社會學説の詳細、及びこれに對する批判等は今こゝに述ぶる邊がない。只私は不完全ながら彼の小傳及び彼の社會學的研究の一斑を述べてこの近代社會學界の一巨擘の訃に對して深甚なる哀悼の意を表するに止めたい。